

---

# 恋愛生活

夢見

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛生活

### 【著者名】

ZZード

N9964V

【作者名】  
夢見

### 【あらすじ】

高校一年の春。地元に戻ってきた悠也を待っていたのは、幼馴染の美優。従姉妹の明菜。同じ学校の先輩の祐希など、個性豊かな女の子たちだった。そんな女の子たちに囲まれ、悠也の生活はどうなってしまうのか!?

不定期更新です。しばらく更新が止まることがあるかもしません。それでもいい、と言つ方のみご覧ください。

## ただいま、美優

俺、小日向悠也は高校二年の春。下田に戻ってきた。  
中学卒業とともに、親の転勤で東京に行くことになった。東京の  
暮らしを結構楽しかったし、何より便利だつたけど、俺にとつては  
静岡の空気の方が性に合つた。

俺が転入することになったのは『私立 風切高等学校』。  
始業式の日、先生に呼ばれるまで俺はB組の廊下で待つていた。

「どうぞ、入つて」

先生の呼びかけに、ガラガラと引き戸を開けて教室に入る。クラス全員の視線が自分に向いていると思つと、緊張する。

先生に促され、自己紹介するよつて言われる。

「えへっと。小田向悠也と言います。東京から来ました。中学までは下田について、一年間親の仕事の都合で東京に行つてました。だから生まれも育ちも下田です。えつと……よろしくお願ひします」

パチ、パチ……とまばらな拍手が起る。

「悠也！ 久しぶりだな！」  
「おう！ 亮！ 一年ぶりだな！ つづかお前もこの高校だつたんだな」  
「まあな。つつうか、一年間まったく連絡疎こさねえで……友情薄いぜ？」  
「ゴメンゴメン。色々忙しくて……」

昼休み。俺に話しかけてきたのは、昔馴染みの香田亮。  
小、中と一緒に、東京に行つても連絡すると約束したのだが、まったく音信不通になつちまつた。  
ちょっと悪いことしたかな……

「フン、どうせ東京の暮らしが楽しくて、俺らの事なんて忘れちま

つたんだろ」「

「そんなわけないだろ。…………、「メン」

「嘘噏。冗談だつて。でも、あいつにも挨拶してやれよ」

「あいつ?」

「井口」

「井口…………つて 美優か!?<sup>みゆ</sup>? あいつもこの高校なのか…?」

「ああ」

井口美優は俺と亮の昔馴染みで、中学にいた時は、俺と美優はすぐ仲が良くて、東京に行くといつた時は、泣かせてしまつた。最後は納得してくれて、笑顔で送つてくれたけど……

「悠也。井口はC組だ。行けりやせ」

「あ、ああ…………」

美優に会えるのはもちろん、嬉しい。でも、俺はどんな顔をして会えばいいのだろうか。

亮の後に続いて、C組に入ると、…………いた。

教室の一一番左後ろ。窓際の席で、友達と談笑していた。セミロングの黒髪に華奢な体。笑うとできるくびきも、一年前と何ら変わっていなかつた。

「井口」

「あ、亮。どうしたの? 後ろにいるのは、友達?…………」

美優が亮の後ろ。つまり俺の方を覗きこんだとき、ぱちり眼があつた。

「…………悠也？」  
「久しぶり、美優」  
俺は少し気まずくなつて俯いてしまつた。

「悠也。帰つてきたの…………？」  
「うん。ただいま、美優」  
「…………一年、一年間。ずっと、ずっと……」

美優は俯いたまま、声をくぐもらせてくる。  
ますい！このままだと、このままだとまた泣かせてしまつ。

俺はとつやに美優に駆け寄つて、肩を支えるよひとする。

「じめん。じめん、美優。…………ただいま」  
「…………うつ…………つかえり、悠也」

「えへ、じゃあお前独り暮らしながらのか？」  
「まあね。気楽でいいよ」  
「ちよつと羨ましいね」

帰り道。三人で帰る一年ぶりの帰り道だ。

あの後、美優の友達には、「突然ごめんね」と謝つたら、「全然気にしないで」と言ってくれた。なぜか、とつても一コ一コした笑顔とともに。

「東京はどうだった？」

「うん、まあ楽しかったよ」

「やっぱ、空気は汚いのか？」

しばらく俺は2人に東京の出来事をしゃべって聞かせた。

話がひと段落すると、亮が途端にニヤニヤしだした。

「悠也～。お前、東京で女つくってないだろくな～」

「えっ？　まさか。俺が相手にされるわけないじゃん」

「いや～。お前の事だから、悪い女に引っかかつたりして、一人大人の階段を上っちゃったのかと……」

「……まつたく。しょうがないなあ、亮は……ねえ、美優……！？」

美優の方をみると、大変ご機嫌斜めの様子で、眉をよせてじとじとした眼を俺に向けていた。

「あ、あの、み、美優さん？　何をそんなに……」

「本当なのね」

「え？」

「本当に、彼女も作っていないし、悪い女に引っかかつてもいいのね！」

すごい剣幕で迫ってくる。

「あ、ああ、っていうか。俺がモテるわけもないんだから、そんな

「」とあるわけないだろ」

「フン、ならないのよ」

美優はブイッ とそっぽを向いてしまつ。

「な、なあ亮。なんで美優あんな怒つてんだ?」

「…………お前の鈍感ぶりも相変わらずだな」

はあーとため息を吐かれてしました。  
鈍い、だろうか俺は。

「2人とも、この後俺の家にこない? お土産の浅草の和菓子があるんだけど?」

「ホント!?」

俺のこの台詞に真っ先に反応したのは美優だった。相も変わらずの和菓子好きだな。

「ああ、美優和菓子好きだろ? 浅草と言えば本場だし、喜ぶんじやないかと思つて」

美優に「『ツと笑つてやる。

「…………するい」

美優がそっぽを向いて何事か呟いたが、よく聞き取れなかつた。

「はあ。この鈍感天然女たらし野郎が」

後ろでは亮も何事か呟いていた。

**ただいま、美優（後書き）**

新連載です。何とぞよろしくお願ひします。

## 妹、襲来

チュン、チュン……  
ん、朝か……眠い。

結局昨日は、亮と美優と夜遅くまで騒いでいた。宴もたけなわとなり、解散したのが11時。その後、美優を家まで送つて、その後部屋の掃除をして、風呂に入り結局寝たのは12時だった。

さすがに眠い。

「ん、……んん~」

枕元の目覚まし時計を見ると、6：45 起きる予定まであと15分。もう少しベットの中こいつよ。

そう思つて寝返りをうつ……うてない。

まるで左腕だけ金縛りにあつたみたいに動かない。いや、それだけではなく俺の左側に何か質量をもつたものがあるような……

俺は注意深く左をそーっと向いていくと、

あどけない顔で眠る従姉妹の姿がそこにはあった。

「あ、明菜！？」

俺はガバッと素つ頓狂な声をあげながら慌てて起き上がった。

「え？ むうん……朝？」

俺が起き上がるヒパジャマ姿の明菜は皿を擦りながら起きてきた。

「あ、お兄ちゃん。一年ぶりだね、おはよー」「そして、満面の笑顔で俺に挨拶するのだった。

遠藤明菜は、俺の母親の妹。つまり叔母の子である。

昔から俺のことを『お兄ちゃん』といい、いつも俺にひつひつしていた記憶がある。

ショーツカットの髪に、くじくじの黒目。愛嬌たっぷりの笑顔がトレードマークの女の子だ。

そんな明菜も今年は中学三年生になつたはず。以前のよつよつベタベタするようなことはもうないと思っていたのだが……

「ふん……はあ～お兄ちゃんの匂いだあ～  
「お、おい。明菜、そんなひつくなつて」

あわいひとか明菜は俺に抱きつき、胸のあたりに顔をうずめてしまた。「これ何とも恥ずかしい。

「ねえ、お兄ちゃん。一年間、寂しかったよ？」  
「う、……わ、悪かったよ  
「連絡もないし」  
「……」「メン」  
「東京で彼女が出来たのかと思った」  
「それはないけど……」  
「ならばよし」

いつたい何がよいのか、相変わらず明菜は俺にくついたままだ。  
そ、それにしても。明菜、成長したな。

身長も、昔は俺より頭一個分小さかったのに、半個分くらいまで  
せまつてくるし……そ、それに他にも女らしいところが色々……  
い、一年前はこんなに大きくなかった。顔も綺麗になつたし……

そんなことを考えつつ、明菜のつむじをみてると、明菜はぱつと顔をあげてきた。俺はそんなことを考えていたせいで、ついやつぽを向いてしまう。

そんな俺を見た明菜はニヤニヤ笑いを俺に向けると、

「お兄ちゃん、いやらしく事かんがえてたでしょ？」  
「うえ！？」  
「ふふふ、嘘噓。顔真っ赤だもん、お兄ちゃん」  
「ま、マジ？」  
「うん。かーわーーー」

愛嬌たっぷりにまにかむ明菜を見ると、一番上のボタンが外れた  
パジャマからせり出していた白い肌と、た、谷間が……

い、いかん。従姉妹相手に何考へてんだ俺は。  
ブンブンと頭を振つて煩惱を迫り払う。

「ねえ、お兄ちゃん」

「！ ちよ、ちよっと明菜ー！？」

油断したといひて明菜がしだれかかるよつて抱きついて来て、俺  
はーとも簡単にベッドに倒されてしまつ。

「おかえり、お兄ちゃん。…………ねえ、おかえりのキスしてあげる

「ええ！！ い、いやそれは、さすがにまずいってー！」

「いいからいいから。ふふ、おにいちゃん」

とろんとした田をした童顔が降りてきて、俺は身動きが取れなく  
なつてしまつた。

どんどん明菜の顔がせまつてくる。や、やばい。逃げられない！

うわ

明菜は可愛い音を立てて俺にキスをした。……ほっぺこ。

「あ…………」

「へへ。キスしちゃつた」

俺はしばし呆然としていたが、はつと我にかかる。

そりやあそうだ。いくら明菜でもそつ簡単に唇にキスはしない。俺ははつとするひとともこ、ちよつと残念な気持ちを抱いていた。

「どうしたの？ む兄ちゃん。いつのまづがよかつた？」

「……ま、まさか……」

明菜は俺の唇に人差指をたてて笑った。

「い、今。俺、残念って思ったか？ おおおおお、何考えてんだ

俺！ ダメだ！ しつかりしろ…！」

俺は心の中で少し残念。と思つた自分を叱責する。

「つていうか明菜。お前、どうやって部屋に入つたんだ？」

「どうつて……玄関のカギ開いてたよ？」

俺は記憶を掘り返す。美優を送つて来て……確かにそのとき鍵を

かけた記憶がない。まったく不用心である。

次からば氣をつけよう。そう思つてしていると、

ガチャ

唐突。唐突に部屋のドアが開いた。

そして、そのドアの陰から顔を出したのは……

「悠也？ 入るよ…………！？」

美優だった。

サアツツツ――――――――――――

俺の顔から血の気が引く。

美優はなぜか昔から、明菜と仲が悪い。

そして今の状況

ベッドの上で仰向けの俺。

その上にまだがる明菜。

部屋の入り口でそれを目撃した美優。

ああ、死んだな。そう、美優は昔から明菜が俺にベタベタすることを快く思っていない。

「おはようございます。美優さん  
「おはよう、明菜ちゃん」

しかし、そんな俺の危惧とは裏腹にこっやかに挨拶を交わす2人。  
こ、これは…………まさか、俺のいない一年間の間に2人の関係に変化が

「さて、悠也。パンチとキック。嫌いな方を選ばせてあげる

あるわけないですよね~

朝の閑静な住宅街に俺の悲鳴が響き渡った。

## 蹴られた痛みは引かない

「まつたぐ、従姉妹にまで手を出すわけ！ アンタはー。」「ほんと、ゴメンナサイ…………でも、それは誤解…………」

登校中、いまだに痛む右足のすねをさすりながら美優の隣を歩いている。

たいそう「立腹の」様子の姉をどうおもめたものだらうかと、俺は頭を悩ませていた。

一メートル程後ろを歩いている亮に田線で助けを求める、「俺は知らねえ」みたいに田をそらされた。友達甲斐のないやつである。

「明菜ちゃんも、明菜ちゃんよー、こんなケダモノの布団に忍び込むなんて、危険すぎやるー。」

ケダモノとはたいそうないわれみづである。

「なあ、美優。悪かつたって。そろそろ機嫌直してよ。な？ 栗崎屋の栗まんじゅうおいひしてやるから」「…………」

「…………」

「3つ」

「5つ」

「う…………分かったよ。今度の日曜、買いくに行こう

「う…………」

俺が美優の条件にしぶしぶ頷くと、美優はやつと怒った顔を崩してくれた。

「そ。じゃ、今日は許してあげる。今度の日曜、買い物にも付き合つて」「え。それは……」「イヤなの?」「……いえ。つき合わさせていただきます……」

美優のじとじとした眼に俺は頷く」としかできなかつた。

「弱いな。お前」「う。仕方ないじゃないか……」「結婚したら絶対奥さんの尻に敷かれるタイプだよな」「……否定できない」

「ん? 美優、何か言つた?」「それにしても、明菜ちゃん。積極的だな……私も、もっと積極的になつた方が……」

「えー？ い、いや。なんでもないよ…」

「……そつか」

何かぶつぶつと呟いていた気がするのだが……気のせいかな？

「それにしても、明菜のやつ、変わったな

「え？ そう？」

「うーん。大人っぽくなつたつづか」

俺がそういう瞬間、後ろで、亮の「あ、バカ……」という呟きを聞いた気がした。

「ふーん。そう。従姉妹の事、そんなえつちな目で見てたんだ」

「うえ！？ い、いやそういう意味でいつたんじゃなくて……

「じゃあ、どういう意味よー！」

まことに。せっかく美優の機嫌が直つたと思ったのに、また怒らせてしまった。

なんでだ？ 今いち、美優の怒りのポイントが分からぬ。そして俯かれてしまった。

「なによ。私に会った時はそんなこと言つてくれなかつたくせに…  
…私だつて、胸おつきくなつたんだから」「う

結局俺は、美優に機嫌を直してもう一つ代償に、次の日曜、映画にも付き合つことになつてしまつた。

昼休み。俺と亮は弁当を持つてC組を訪れていた。朝の件を改めて謝るためもある。

美優の席へ近づくと、昨日も会つた美優の友達がまた談笑していた。

「あ、ども」  
「おっす」

俺と亮はそれぞれ声をかけ、それぞれ近づいていく。

「あ、やつほ～。小日向君、香田君」

「や」

「こんにちは」

えつと、確かに……左のショートカットの活気的な女の子が嵐山涼子さんで、真ん中の茶髪のセミロングの人<sup>弓野杏子</sup>さんで、右の眼鏡をかけた委員長が松山信子さんだったかな。

「昨日はごめんね嵐山さん、弓野さん、松山さん」

「あ、もうさっそく覚えてくれたんだ～。よろしくね～小日向君」

「ウチらは全然気にしてないよ」

「ちょっとびっくりはしましたけれど……」

もうすでにこの三人は昨日の事は気にしてないみたいだ。

「それにしても～ 小日向君、美優の幼馴染なんだって？」

「え、うんまあね」

「いつから？」

「家が近くで……幼稚園のころから」

「どうして、東京にいかれてたんですか？」

「親の仕事の都合でね」

が、三人は矢継ぎ早に質問していく。そんなに俺が珍しい存在なのかな。

と、弓野さんが俺の顔をじ～っと見つめてくる。「～なんか恥ずかしい。この三人、みんな可愛いんだよなあ

「なるほどね」

「？」

「美優って可愛くて、告白もけつこうされてるはずなのに誰とも付き合わないからおかしいとは思つてたんだけど…………」

「納得ですね」

「男に興味がないのかと思ひきや！ その実態は一途に一人の男を思ひ続けるんだね」 ふふふ

「ちょ、ちょっと三人とも！ 何言つてんのよーーー！」

美優が慌てて三人の口をふさいで、止めようとしたが、……無駄じゃないかな。

「ふふふ。美優ったら、顔真っ赤にして、可愛いーーー！」

「なつ！」

「美優。応援してますよ」

「うんうん、がんばれ～」

「う、うわあああ……」

美優はすっごく嫌そうな声をだして机につづپしてしまった。

「ねえ、小田向君！ 今、好きな人いる？」

「え？ いや、いなーいけど……」

「好きなタイプは～？」

「……特になーいかな」

「彼女欲しい願望はないんですか？」

「そりゃあ、いたらしいとは思うけど……」

何というか……俺はこの三人の女気に思いつきりあてられてしまつたようだ。

俺は昼休み終了の予鈴とともに、三人に笑顔を持つて、送られて

しまつ  
た。

## ねこじこ朝1J飯（繪書モード）

大ひつひつひつひつ變、申し訳ありませんでしたあ……（ナード座）

いっし、訳をわせてください。

ぱ、パンノンがですね。インターネット回線が繋がらなくなってしま  
て……

戻った後も、なんやかんやとこじへじへじ、こがつたりませんでし  
た。

これからも、頑張りますので、どうかよろしくお願ひします。

## おこじこ朝いり飯

チヨン、チヨン  
ん、朝か……

ベッドの中でん~と伸びをする。

はつ！

俺の脳裏に昨日の光景がフラッシュバックする。  
まさか、今日も明菜が……

がばつ

俺は咄嗟に身体を起こし、身構える。  
ベッドの中には……誰もいない。

ほつ。まあ、そりゃそつか。昨日の夜はあつちつた闇のカギを閉

めて寝たし。  
俺はパジャマからジャージに着替えると、リビングへと降つる。

がちや、ヒコビングのドアを開けると……

「あ、おはよう。悠也」

俺はドアを開けたまま固まってしまった。

え？ なんで、美優がここにいるの？

「ああ、おはよう」

俺は条件反射的に朝のあいさつをかえすが……って

違つ違つ違つ！

「つて美優！？ 何でいるの…？」

「何よ、こちや悪い？」

「いやいやいや、そもそもどうせ入ったのかー。」

「え？ 一階の洗面所の窓があいてたから、廊下を上がって……

アンタはどこのアクションスターだ……とにかくみをぐつとい  
らえて、ひとまず落ち着く。

俺はリビングのテーブルについて、ふと美優を見やる。

「…………」

なんというか、髪をひとまとめに後ろでくくって、制服の上から  
エプロンをつけている美優は、何というか、と、とも……か、  
可愛い。

「？ 何？ ジロジロ見て」

「！ い、いや、何でもないよ」

まさか、エプロン姿に見とれてしまった。とは言えない。

「？ 变なの」

美優はそう言いつつ、テーブルの上に料理を次々と運んでくれる。  
白いご飯に、味噌汁。塩じやけ、だしまきたまご。ザ・日本の朝食といつた感じだ。  
いいなあ。やっぱ朝ご飯は和食に限るよね。

そう思いつつ、だし巻き卵をパクリ。

「！ 美優……」

「え、もしかして不味かつ、た……？」

俺が食べる様子をじっと見つめていた美優は、不安そうに上田遣いで訊いてきた。

いや、これは……

「すうつげえ、うまい！ 一年前よりうまい！ 料理、うまくなつたなあ、美優」

「そ、そつか。よかつた。……私の料理の味、覚えてくれたんだ？」

「？ 何か言ったか？」

後半何やらブツブツと呟いたように聞こえたんだが……

「うんうん！ 何も言ひてないよ！」

「…………」

うん、やっぱめめめ！ ほんをがつがつ食つ俺を見て、美優は

何故か嬉しそうな表情でお茶を飲んでいた。

「将来、いい嫁さんになるな、美優は」

「ぶつぶおつ！」

俺が唐突に思つたことを言つと、美優は飲んでいたお茶を盛大に吹いた。心なしかかおもほんのり桜色に染まつてゐる。

「ゲホゲホッ、何すんのよ！」

「いや、まるつきり「ツチの台詞なんだが……」

俺は顔にかかるお茶をティッシュペーパーで吹ぐ。口の周りのお茶はペロッと舐める。と。

美優の顔が盛大に赤く染まつていた。

「お、おい。どうした？ 大丈夫か？」

「あなたのせいよ～」

美優はそう言つてテーブルに突つ伏してしまつ。

とりあえず、俺は制服に着替えに二階に上つた。

着替えて降りていくと、美優は復活していた。

「もう、大丈夫なのか？」

「…………大丈夫」

そう言つと、俺の前に風呂敷で包まれた、箱状のものを差し出してきた。

「はい。お弁当」

そっぽ向いて頬を染めて、手渡される。

「あ、ありがとうございます……」

「つていうが。さつきも思つたんだけど、美優は朝飯食わないの？」

「え？ 私はもう食べたわよ」

ということは、美優は俺の朝飯と弁当をつくるために、朝早くから俺の家に来たつてこと……

「…………美優」

「…………何よ」

「…………ありがとう」

「…………」

## 走れ！俺

高校一年が始まって、一週間が過ぎた。  
桜は今だ咲き誇っている。

段々とこの学校にも慣れてきたかな、と思い始めていた。

「あれ？」

昼休み終了五分前。

二年B組の教室のドアに手を掛けると、ふと違和感がある。

見上げると、そこには二年B組の文字が書かれた札が。

「ああ、またか……」

俺は思わず肩を落として咳いでしまう。

この学校、なぜか、一年生が一階。二年生が二階。三年生が二階。  
といつ、ちょっと複雑な教室配置になっている。

俺はいまだに慣れなくて、よく三年生の一階の教室に向かおうとしてしまうのだ。

まあ、教室に入る直前に気付いてよかつた。

俺は踵を返して階段の方へと向かう。

一階の階段の前は、少し大きめのスペースになつていて、「ミニコニティースペースとなつている。お昼をここで食べるもよし、友達としゃべるもよし。時たま、学年のイベントで使われることもあるようだ。

まあ、今は授業開始まで僅かしか時間がないし、人の姿はみられないが……ん?

そのミニコニティーグラウンドの奥の方、左側が、少し窪んだスペースになつていて、ここからは見えにくいけど、そこだけ明かりがついている?

普段こここのスペースは消灯されていて、昼休みの間は付いている。一応最後の人が消すことにはなつてているのだが……でも、全部電気がつけっぱなしになるとかく、そこだけ電気がついているのはおかしい。スイッチの場所は同じところなのに……

俺は気になつてそのスペースを覗いてみると、

壁伝いにそつと覗いてみると、

「！」

俺は一瞬、驚いた後、すぐさま駆け寄った。  
スペースの奥の壁に、人が寄りかかって座り込んでいた。

茶髪のウェーブヘアに、すらりとした手足の女生徒。  
駆け寄つて、しゃがんで顔をのぞきこむと、顔は青ざめ、汗がに

じんで、呼吸が荒い。

「大丈夫ですか！？」

俺は右の肩をつかんで軽くねするよひにじて、半ば叫ぶよひにじて、訊く。

「大……丈、夫……」

彼女は弱弱しい声で、そう呟くのがやつとのようだつた。どう見ても、大丈夫のようには見えない。

保健室。確か場所は……一階の西の端　ここには東の端に近いから、ちょうど反対の場所か

この様子だとけつこう切羽詰まつてゐる感じだ。急がないと

俺は彼女の体を一度持ち上げ、自らは背を向けると、背中に乗せるようにして、立ち上がる。

おんぶした後はひたすら走る。

廊下だろうと階段だろうとひたすら走る。

それにも……この人、軽すぎないか……？

俺より少し低いぐらいなのに……俺の身長が173センチだから168センチぐらいだろうと思つ。それなのに、背負つているのが感じられないぐらい、羽のよつに軽い。

なんたることか、こんな時に限つて保健の先生は不在である。と  
りあえず、俺はベッドに寝かして、布団をかける。  
が、荒い息が收まらない。やきもきしながら見ていことしかで  
きない俺だったが、ふと彼女の喉元から、ヒュー、ヒューと音が漏  
れているのが聞こえる。

この症状……

「喘息か！」  
ぜんそく

一階の廊下を、全力疾走した俺は、保健室のドアを開け放つ。

「先生！」

俺は急いで、近くにあつた薬箱をあさり始める。  
ぜんそくの薬の細かいことはわからぬ。けど、必ずある薬でな  
んとか……

「あつた!」

せき止め錠。市販の薬でも、一時のせき止めとなるはず。

俺はコップに水を汲み、彼女のもとへ持つてこべ。

「ひいかもしませんが、飲んでトセー」

俺は彼女の体を右手で起しつゝにして錠剤を口へふくませる。  
そしてコップを口に近付けて、少しづつ、注ぐみづとする。

どうやら、飲んでくれたようだ、とつあえずこれで一安心だ。二  
十分もすれば、息もおさまるだろう。

さつきはあせつていて氣付かなかつたが、このベッド、上半身の  
角度を調節できるようすで、俺は角度を三十度ぐらいにしておいた。

はあ、疲れた。そりやそうか。人一人背負つて、猛ダッシュした  
んだから。

それにしても……改めてみると、この人、すっげえ綺麗だ。線  
が細くて、まつ毛長くて、色が白くて……って変態見たいだな、  
俺。

でも、妙と言えば妙である。なんでこの人、あんな場所で苦しん  
でたんだろう。それに、あそこにいれば、誰か見ているはずである。  
…………まあ、考えても仕方ない。

「あら？ だれかいの？」

ガラガラと音がして、保健の先生が入つてくる。  
若い女性の先生。

「えっと、一年B組の小口向悠也、と言います。実は……」

俺はあつたことを、そのまま話した。

その先生は時折、びっくりしたような表情で俺の話を聞いていた。

「そう……ありがとう」

「いえ……」

「彼女……中島綾乃さんとこうのだけど、ぜんそく持ちで体が弱くて、よくここにくるのよ。でも、喘息の常備薬はもつてゐるはずなんだけど……」

そう、だつたのか。大変だな、体が弱いのに、学校に通つとこうのは。

「それにしても、よく知つてたわね。せき止めの薬が、喘息に効くつて」

「ああ、俺も……小さい頃、喘息にはだいぶ悩まされましたから。今ではもうほとんどおさまっているんですが……」

俺自身、喘息持ちで、小さい頃は本当に風邪をひくと、せきがとまらなくて、滅茶苦茶苦しい想いをした経験がある。

病院でやる「吸引」もすっげえ苦いし……

「じゃあ、俺はこれで。授業がありますし」

「ええ。本当にありがとうございます」

俺はそういう保健室を後にした。

映画と買い物はデートの定番です

とある日曜の朝。

駅前の広場は日曜といえども、行き交う人であふれていた。

四月。春と言つてもまだまだ肌寒い。

行き交う人の中には、コートの前を抱いて、せかせかと先を急ぐ人も見受けられた。

駅舎の柱によりかかっていると、

「悠也ー！」

待ち人来たり。

美優は少し小走り気味にこちらに駆け寄つてくる。

今日は、以前美優と約束した、映画と買い物の日。

家が近いのだから、別に近くで待ち合わせてもよかつたのだが、美優の強い希望によつてここで待ち合わせになつた。

「おう。美優、おはよ……」

振り返つて挨拶しようとした俺は思わず言葉を切つて、美優をじーっと凝視してしまつ。

「…………？ 悠也？」

「…………！ ああ、「めん」「めん。おはよう美優

びっくりした。今日の美優は白いワンピースに赤いリボンをつけて、なんか……似合つてゐるつてのもあるけど……すつじぐく可愛い。

思つても言えないけど、美優は一年前よりずっと可愛く、綺麗になつた。

嵐山さんたちの話では学校でもかなり話題をされていゝようだ。

いつか、美優も誰かと付き合つんだろうか？  
それは……寂しいものがあるな。

「えつと……待つた？ 悠也。『ごめんね』  
「いや、全然。今来たとこ」

本当は15分前には着いていたのだが、まあわざわざそれを言つ  
ことない。

「……ふふつ、ありがと」

……美優には見抜かれてるっぽいけど。

美優と並んで駅から歩いて20分ほどの大きなショッピングモー

ル内にある映画館は、日曜と言つてもあつて結構な人であふれていた。

薄暗い、ちょっと変わったにおいがする映画館のロビーに入つていくと、

「見る映画って決めてるの？」

美優がそう聞いてきた。

「いや、当田美優の希望を聞いて決めようと思つて」

「うへん。でも……」

俺と美優が好む映画のジャンルはかなり異なる。

俺はアクション系

美優はファンタジー系が好きだ。

どうしようか……

そんなことを考えていると、ふとある看板広告が目にに入った。

『遂に日本上陸！ 米で一大旋風を巻き起こしたファンタジーサスペンスアクションラブストーリー！』

「ねえ美優……」

「ん？」

俺の視線の先を美優も追つかけてその広告を見つける。  
そして、2人してきっと微妙な表情になつてているだらう。

「…………」

.....」

言いたいことは色々あるが、とりあえず面白いのだろうか。

「どうする？」  
美優

「うん……他に面白そうなのもないし、あれにしようか」

まあ、ひょつとしたら当たりかもだしな。

「高校生2枚下さい」

卷之三

チケットを2枚受け取つて1枚を美優に渡す。

「奢り?

一  
当然

映画の上映場は少し肌寒かつた。軽く冷房が効いてるかもしれない。少し厚着気味の俺で肌寒いんだから、美優は……

と思つて隣を見ると、予想通り肩を抱くよつこしていた。

俺は自分のコートを脱いで、美優の肩にかぶせる。

「…」

少し驚いたような顔をした美優も次にはコートの袖に腕を通していた。

「……ありがと」

消え入りそうな声だったがそう言つたのは間違いなかつた。

「面白かった」

「ああ。ちょっと想定外に面白かった」

ショッピングモールの一角。喫茶店に俺と美優は着いていた。なお、美優は俺のコートが気に入つたらしく、顔をうずめるようにして着ている。

映画はそれぞれの要素が互いに良さを出し合って、思いの外面白い仕上がりとなっていた。

大当たりである。

「ホットサンド、お待たせいたしました」

店員さんが料理を運んで来てくれる。

「…………美優。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「…………？ 何？」

俺はずっと気になつていた先日の保健室エスケープ事件を美優に説明した。

「はあ。なんであんたはそんなトラブルに巻き込まれやすいのよ」

「つづ……そなこと言われても」

美優は俺の話を聞くと、苦笑いしながらそんな事を言った。

そして、ふうと一つため息をつくと、少し真剣な顔になつて言った。

「中島綾乃さん。2年C組。私たちと同じ学年よ。」

「同じ学年……」

「うん。それでね……中島さん、私たちより一つ年上なんだよ」

「……え、留年してること?」

「そう。彼女、あんな感じで病気がちでしょ。出席足りなかつたみたい」

「そうか。そんな事情があつたのか。

「それで、どうやら中島さん。あんまりクラスに馴染めてないみたい」

分かる気がするな。クラスの人は自分より1個年上の人との接し方に戸惑っているのだろう。

でも、まだ4月だし、これから状況はいくらでも改善されるだろう。

「ん……ありがと、美優」

俺は美優にお礼を言つと、立ち上がった。

「じゃ、買い物に行くか!」

「うん!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9964v/>

---

恋愛生活

2011年11月11日04時42分発行